

実績評価書

平成16年7月

政策体系	番号	
基本目標	1	安心・信頼してかけられる医療の確保と国民の健康づくりを推進すること
施策目標	9	新医薬品・医療用具の開発を促進するとともに、医薬品産業等の振興を図ること
	Ⅲ	バイオ技術、ナノ技術等の先端技術を活用し、画期的な医薬品、医療用具等の研究開発を推進すること
担当部局・課	主管部局・課	医政局研究開発振興課
	関係部局・課	

1. 施策目標に関する実績の状況

実績目標 1	画期的な医薬品、医療用具等の開発の促進による治癒率の向上、患者のQOLの向上を図ること				
(実績目標を達成するための手段の概要)					
・画期的な医薬品、医療用具等のシーズの研究開発費の確保、治験等の臨床研究実施に必要な治験コーディネーター(CRC)の養成、治験活性化のモデル事業の実施等の基盤整備事業等を実施している。					
(評価指標)	H11年	H12年	H13年	H14年	H15年
新医薬品・医療用具の承認取得数(件)	39	39	23	24	15
上段：新医薬品	33	13	6	10	8
下段：新医療用具					
(備考)					

2. 評価

(1) 現状分析

現状分析
<p>21世紀に入って、ヒトの遺伝子が解読され、ゲノム科学やタンパク質科学等を応用した新しい創薬手法(「ゲノム創薬」と呼ばれている)による新薬開発競争が激化しており、その成果が本格的に現れる2010年頃には、「新薬黄金時代」を迎えることが予想され、急速な高齢化が進展する我が国においても、活力ある長寿社会の実現のためゲノム科学等の成果を活用した画期的医薬品の開発が期待されている。しかしながら、医薬品・医療用具が開発され医療の現場に流通するまでには、膨大な研究費用と長い研究期間を要するとともに、国民の生命・健康を守るために必要不可欠な安全確保に資する厳しい薬事規制等のハードルを越えなくてはならない。</p> <p>また、近年は、医薬品の研究開発を巡って製薬企業間によるグローバルな競争が激</p>

化しているが、残念ながら、創薬環境として我が国の市場は国際的に魅力的なものとなっておらず、このままででは、我が国の医薬品等産業の国際競争力は将来弱体化していく可能性が高い。

(2) 評価結果

政策手段の有効性の評価

最近の科学技術研究のうち、ライフサイエンス分野に関しては、先進各国とも経済発展の牽引分野として位置付け、重点領域化して取組を強化している。特に研究開発費の絶対額の差は日米で拡大し、例えば、画期的な医薬品開発技術のイノベーションに期待の高い「ゲノム創薬」関連の我が国の研究開発水準は、欧米に遅れている点は否めない。しかしながら、我が国におけるゲノム関連研究への集中的予算配分（総合科学技術会議において、資源配分の重点分野となっている）によるライフサイエンスの充実に関しては、海外との競争力強化等の観点から一定の効果が認められる。

また、「ゲノム創薬」においては、研究者が取扱う生命関連データ（SNPs（Single Nucleotide Polymorphism：遺伝子多型）、疾患関連遺伝子、タンパク質データ等）の量が飛躍的に増加しているため、IT とバイオ技術を融合させて新薬に結び付ける情報を引き出す技術（バイオインフォマティクス）を駆使して、研究スピードを引き上げることが必要となっている。このため、バイオインフォマティクス分野を含めたゲノム関連研究分野への予算の重点的配分を実施しているところであり、今後一定の効果が生ずることが期待されている。

さらに、治癒率や QOL を向上させるための画期的医薬品の実用化に向けては、治験を含む臨床研究が不可欠であるが、治験が主に海外で実施され、日本の医療機関では治験が実施されないという治験の空洞化等の問題を抱える我が国において、企業単独では実施の困難な CRC の養成等の臨床研究の推進に向けた基盤整備の実施についても政策的有効性は高い。

政策手段の効率性の評価

我が国のゲノム関連研究等のライフサイエンス分野への集中的予算配分については、総合科学技術会議を頂点として、各研究に関して多角的視点から分析・評価を実施することにより、全省庁を通じて効率的に実施されているところである。

また、厚生労働省においては、個別の研究分野に係る研究の一層の活性化を図るため、「厚生労働省の科学研究開発評価に関する指針」（平成 14 年 8 月）に基づき、外部評価委員による評価を実施し、画一的、短期的な視点のみにとらわれないよう留意しつつ、その評価結果を研究費等の研究開発資源の重点的・効率的配分や研究開発計画の見直し等の研究企画に適切に反映させている。

総合的な評価

CRC の養成等の臨床研究の推進に向けた基盤整備事業等の実施により、治癒率や患者の QOL を向上させるための実用化に向けた取組が見られるとともに、ゲノム関連研究等のライフサイエンス分野の研究開発へ効率的に資源配分がなされており、実際に治験届提出数が増加傾向（治験届の提出数…平成 13 年：43 件、平成 14 年 60 件、平成 15 年 60 件）にあることから、施策目標の達成に向けて進展があったものと評価できる。

評価結果分類	分析分類
③	②

3. 特記事項

①学識経験を有する者の知見の活用に関する事項

ゲノム関連研究のうち、ミレニアム・ゲノム・プロジェクト（新しい千年紀プロジェクト）（※）については、内閣官房に学識経験者からなるミレニアム・プロジェクト評価・助言会議が置かれ、評価を実施している。また、これ以外の厚生労働科学研究費事業については、厚生労働省において外部評価委員による評価の研究費採択等への活用を行っている。

※ 平成11年12月、新しいミレニアム（千年紀）の始まりを目前に控え、夢と活力に満ちた次世紀を迎えるために、今後我が国経済社会にとって重要性や緊要性の高い情報化、高齢化、環境対応の三分野について、産学官共同プロジェクトを構築し、明るい未来を切り開く核を作り上げるもの。

②各種政府決定との関係及び遵守状況

ゲノム関連研究のひとつであるミレニアム・ゲノム・プロジェクトについては、平成12年の内閣総理大臣決定に基づき実施されており、また、その他の研究についても、平成14年6月に閣議決定された「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2002」の柱となる技術力戦略に記載される内容の事業が主体となっている。

③総務省による行政評価・監視等の状況

なし。

④国会による決議等の状況（警告決議、付帯決議等）

なし。

⑤会計検査院による指摘

なし。